

米軍基地と沖縄

糸洲のぶ子(沖縄 Y W C A 会員)

こどもの日に、名護市瀬嵩の浜でキャンプを楽しんでいる家族連れがありました。海岸線の美しい浜でキャッチボールをしているお父さんと息子、その側で見守っているお母さんとおばあちゃん。日常の何気ない光景。しかし、目の前の大浦湾には突起物のあるフロートが対岸のキャンプ・シュワブ沿岸を囲むように広がっています。ジュゴンも時折姿を見せた青い海の下にはアンカーとして巨大なコンクリートブロックが投下されたのです。

4月25日、国は県民の民意に反して、辺野古沿岸を埋め立てる護岸工事に着手しました。その日は碎石5袋を海中投下、パフォーマンス的だとの声もありますが、じわじわと触手を伸ばしてきているのは事実です。キャンプ・シュワブゲート前で土砂を積んだトラックの搬入阻止行動を続けている方の「ゲート前へ結集して下さい」との悲痛な訴えを聴きながらも、時間的制約などでその場へ駆け付けられない自分がいます。非暴力で「抵抗」し続けることの難しさと忍耐を改めて感じています。

元米海兵隊員の軍属によって若い女性が命を奪われた事件から一年が経ちました。事件後、現場に花を手向けた時、「彼女の死を無駄にしたいくない。もう、誰も殺されたくない」と心底から哀しみと怒りが噴き上げてきました。基地があるゆえに起こる事件、事故は後を絶ちません。軍事基地は人の命を守りません。軍隊の本質は破壊と殺戮^{きつりく}であるからです。

沖縄の米軍基地は、沖縄戦の最中、住民を収容所に強制収容している間に米軍が地主の同意もなく土地を強奪して建設を開始し、戦後もそのまま占領し続けました。私は、毎週月曜日の夕方、「普天間基地ゲート前でゴスペルを歌う会」に祈りと賛美で参加している中で、普天間飛行場がこのようにして造られ、美しい松並木(じのーんなんまち)がブルドーザーによって無残にも滑走路と変えられてしまったこと、土地を奪われた住民は基地の周辺に住まわざるを得なかったことを理解しました。これは人権侵害そのものであり、構造的差別です。老朽化した普天間基地は直ちに運用を停止し、然るべき処置をして返還されるべきものだと思いますが、政府は代替地として辺野古に新基地建設を強行しています。

沖縄人が「屈辱の日」と表現する 1952 年 4 月 28 日のサンフランシスコ講和条約によって、沖縄は米施政権下に置かれ、沖縄の長期占領も具現化されました。基地負担の差別的処遇の歴史をたどると、沖縄だけに基地を強いられているのは耐えられません。県外移設も含めて、本当に基地が国内に必要なのかを当事者意識を持って考えていく事が国民一人ひとりに求められていると思います。憲法 9 条の平和の理念を守ってきた日本は、この先も民主主義を貫き通せるのでしょうか。

沖縄 Y W C A では若い方々を中心とした憲法カフェをスタートしました。